

論文審査及び最終試験又は学力の確認の結果の要旨

①・乙	氏 名	加藤 晶	
学 位 論 文 名	Discrepancy between subjective and objective postoperative oral dysfunction assessment after oral cancer treatment: A single-center cross-sectional study		
学位論文審査委員	主 査	佐野 千晶	  
	副 査	新野 大介	
	副 査	牧石 徹也	
論文審査の結果の要旨 口腔癌治療において、近年の手術手技や再建術、エビデンスに基づく放射線化学療法に進歩により、治療後の生存率は向上している。しかし、手術による器質的変化や放射線・化学療法による早期および晩期障害といった治療による口腔機能障害が生じることが少なくない。近年、がん治療における副作用や有害事象の評価において、医療者による評価診断・検査だけでなく、患者自身の主観的評価も重要視されるようになり、様々ながん種や治療において、医療者の客観的評価と患者の主観的評価とが一致しないことが指摘されてきた。しかし、これまで口腔癌治療後の口腔機能障害に関する報告はみられない。そこで申請者は、口腔癌治療後の口腔機能障害の評価が、主観的評価と客観的評価とで一致しているかどうかを検証することを目的として研究を実施した。2019年9月から2021年12月の間にNCCNガイドラインに基づき治療を受けた75名の口腔癌患者（男性52名、女性23名、中央値72.0歳）を対象に、背景データの収集および口腔癌一次治療後の退院前日に、口腔機能低下症の診断に用いられる各種口腔機能検査（口腔内細菌量、口腔乾燥度、咬合力、舌圧、咀嚼機能、EAT-10）を実施し、その結果を評価した。主観的評価は自記式質問用紙であるPostoperative Oral Dysfunction-10（POD-10）スコアに基づき、カットオフ値の24点を基準として高値群と低値群に分け、各口腔機能測定値と比較検討を行った。腫瘍原発部位は、舌（41.3%）、歯肉（40.0%）、その他（18.7%）であった。POD-10との一致度を示すカッパ係数は、咬合力が0.41、咀嚼機能が0.27、EAT-10が0.59であり、これらは有意に一致した。相関分析においても、咬合力、咀嚼機能、EAT-10が有意な関連性を示した。多変量解析では、咬合力とEAT-10がPOD-10と有意な関連を示した。MK（Matsuda-Kanno）分類に基づく術後性口腔機能障害の分析では、Type III（咬合型）において主観的評価と客観的評価が一致しやすい一方で、Type I（輸送型）およびType II（口腔衛生型）においては一致せず、患者が自身の口腔機能障害を過小評価する傾向が明らかとなった。口腔癌治療後には急激な口腔機能の変化が生じるため、患者が自身の変化した身体に順応することが困難である。したがって、患者の自覚症状や訴えを傾聴し、客観的評価をフィードバックすることで、患者が治療後の口腔機能障害により早期に適応できるような治療サポートが可能となると結論付けられた。本研究は、口腔癌治療後に頻発する摂食嚥下障害や誤嚥性肺炎等のリスク因子解析にも有用な知見である。 最終試験又は学力の確認の結果の要旨 申請者は、口腔癌治療後の口腔機能障害に関して、患者の主観的評価と各種検査による医学的な客観的評価との一致性、相関性を検討し、咬合力、咀嚼機能について関連性が高い一方で、口腔の衛生状態や乾燥については患者が自覚評価しにくいことを明らかにした。増加している口腔癌患者の治療後QOLへ寄与する結果であり、周辺関連知識も豊富であり学位授与に値すると判断した。（主査 佐野 千晶） 申請者は、口腔癌治療後の口腔機能障害に関して、POD-10スコアに基づき患者の主観的評価と客観的評価との相関性を検討した。一致する項目と一致しない項目を抽出し、その原因についても考察した。質問に対しても適切に回答でき、周辺関連知識も豊富であり、学位授与に値すると判断した。（副査 新野 大介） 申請者は、口腔癌治療後の口腔機能障害についての主観的評価と客観的評価にズレが生じている可能性に着目し、それぞれが一致しない項目を明かにした。得られた知見は口腔癌治療後の患者の予後改善にも寄与するものとする。周辺関連知識も豊富であり、学位授与に値すると判断した。（副査 牧石 徹也）			

（備考）要旨は、それぞれ400字程度とする。